

書評: *The People's Republic of Amnesia: Tiananmen Revisited*

村井寛、神奈川大学

Louisa Lim, *The People's Republic of Amnesia; Tiananmen Revisited*. New York: Oxford University Press, 2014. 266 pages. ISBN-10: 978-0190227913, ISBN-13: 978-0190227913

本書は、2013年までBBCやNational Public Radio (NPR)の中国特派員を歴任した著者が、1989年の民主化弾圧運動（天安門事件）をめぐる歴史的記憶（とその忘却）について、様々なレベルの当事者へのインタビューにより再構成を試みた書である。本書の構成は体系的なものではないが、私見では取り上げられた内容は3つに分けられるように思う。

1) 運動に参加し、弾圧された側、及びその親族。第二章「とどまり続けること (Staying)」に登場する張銘 (Zhang Ming) は当時の学生リーダーの一人で、7年間の獄中生活で受けた度重なる拷問の後遺症を今も引きずっている。第三章「亡命 (Exile)」のウーアルカイシ (Wu'er Kaixi) は、1989年の運動の学生リーダーの一人で、ハンストなどの目立つパフォーマンスで注目を浴びていた。その後も逮捕覚悟の帰国パフォーマンス等で一時の注目を集めるが、実際にはほとんど政治的影響力を持っていない。親族として第五章「母 (Mother)」に登場する張先玲 (Zhang Xianling) は、当時19歳の息子を事件で殺され、同様に息子を失った丁子霖らとともに、真相究明と謝罪を要求する「天安門の母たち」 (Tiananmen Mothers) 運動を立ち上げた。そのことによって政府からの厳しい監視を受けつつも、時に逮捕されつつ、今も運動を続けている。第八章「成都 (Chengdu)」は、1989年に成都で起こった民主化運動とその弾圧について取り上げ、「天安門事件」の呼び名の陰に隠れた、地方の弾圧の実態究明を試みる。

2) 事件当時、軍や政府の側にいたが、結果として弾圧された側に近い立場に置かれることになった人々。第一章「兵士 (Soldier)」に登場する画家の陳光 (Chen Guang) は、事件当時17歳で兵士として鎮圧作戦に参加し、そのトラウマを抱え続け、周囲の忘却に抗し、事件を記憶する作品を作り続けている。第七章「官僚 (Officials)」で取り上げられる鮑彤 (Bao Tong) は、当時、改革派の重要な官僚であったが、事件によって失脚、投獄された。息子の鮑樸は香港で共産党の流出文書な

どを扱う出版社を営んでいる。

3) 事件を忘却した側の人々。第四章「学生 (Student)」では、現在の学生の意識が取り上げられる。政府の情報統制により若者たちはほとんど事件について知らされていないが、知る機会があったとしても、関心を持とうとしないという実情が示される。第六章「愛国者 (Patriot)」では、事件後、統治の正統性の危機に面した中国共産党が採用した愛国主義教育の広がりや、自国の政府に対する抗議よりも、政府を擁護して他国を非難するためのデモに参加する愛国主義教育世代の考えが紹介される。こうした内容は、直接天安門事件に関わるものではないが、書名の“Amnesia (記憶喪失)”という語に表れるように、事件が現在の中国でいかに忘却させられているかということも、本書の重要なテーマとなっている。忘却に抗する個々人の懸命な努力も、それを抑圧する権力と、無関心な大衆を前にした無力感と表裏のものとして描かれており、結び (Epilogue) で紹介される 2014 年の香港の民主化要求デモに、かすかな希望が託されている。

天安門事件について語る時、学生リーダーたちの側の態度にも問題があったのではないか、あるいは、弾圧の方法自体は非難されるべきだが、安定を回復したことがその後の中国の経済発展につながったのではないか、等の問いが投げかけられるかもしれない。前者について、亡命した学生リーダーたちが語った「天安門広場での虐殺」の証言は虚偽を含むものであるとの指摘や（「死傷者が出たのは「広場」ではなかった」等）、学生リーダーたちの強硬な対決姿勢にも悲劇を招いた一因があるのではないかという批判は、事件直後からなされていた。本書でも、当時の学生リーダーの柴玲 (Chai Ling) やウーアルカイシに向けられた批判や、張銘が今も抱える自責の念について言及されている。

とはいえ、事件の記憶をたどることは、当時の学生リーダーたちの主張に共感するか、あるいは運動を肯定的に評価するかどうかという次元とは、異なる意味を持つのではないだろうか。現在も中国にとどまっている関係者たちは、逮捕・投獄を経て、今もなお厳しい監視状態に置かれている。事件の真相を追究したり、語ろうとする者も同様で、第 1 章の陳光は本書刊行後の 2014 年 5 月初頭に逮捕されているし、同じ頃に逮捕された著名な人権弁護士・浦志強氏らについても、事件の記念活動への参加が逮捕のきっかけになっている。こうした弾圧が続くこと自体、事件の記憶が経済発展によって相殺された訳ではなく、共産党統治の正統性を保つためには、いまだ暴力的な手段でもって事件の記憶を封

印することが要請されていることを示している。汪錚 (Wang Zheng) の言葉を借りて言えば、「中国の民主化はこれらの歴史的真相を明らかにすることでようやく端緒につく (“China’s democratization might finally begin from the point of disclosure of these historical truths”)」といえるのかもしれない¹。

本書で取り上げられた人物の多くは、本書以前に香港のメディア等で知られており、著者が独自に「発見」したとは言えないかもしれないが、台湾や香港にいる何人かを除けば、いずれも当局からマークされている人物であり、取材には大きなリスクが伴ったものと思われる。その意味で、本書の試みは、反右派闘争等で弾圧された知識人を題材とした胡杰 (Hu Jie)、王兵 (Wang Bing) らの一連のドキュメンタリー映画とともに、「記憶の民主化」の困難な一歩として位置づけられるだろう。

最後に、自国にとって都合の悪い歴史を隠蔽しようとする力が働くこと自体は、アメリカや日本などの“民主主義国”も例外ではなく、「記憶の民主化」は、中国のみに留まる問題ではないことを、付言しておきたい。

¹ Zheng Wang, *Never Forget National Humiliation: Historical Memory in Chinese Politics and Foreign Relations*. (New York: Columbia University Press, 2012), extracted from Kindle, location no. 5015.